宿絵図から見た家屋平面と町並みの変遷過程

中山道小田井宿の家屋平面と町並み構成 その2

DEVELOPING PROCESS OF THE HOUSE PLAN AND
THE TOWNSCAPE SHOWN IN SHUKUEZU

A study on the house plan and the townscape of Otai post town in old Nakasendou Part 2

山崎 信明*

Nobuaki YAMAZAKI

I analyzed the developing process of the house plan and the townscape of Otai post town in the "Shukuezu"; old maps in the Edo era.

As a result, from the middle toward the end of Edo era, some of the post town buildings had developed a more functional approach, which could be seen in the highly sophisticated living spaces and guest spaces. However, a similar house plan to the typical peasant's house was still seen in many of the buildings of post town of the end of Edo era.

In addition, each Kamimachi, Nakamachi and Simomachi had different views of the outside.

<i>keywords</i> : <i>house plan,</i>	<i>townscape,</i>	<i>post town,</i>	<i>Nakasendou</i>
家屋平面	町並み	宿場町	中山道

はじめに

本稿は、旧中山道宿駅の調査研究の一部で、前稿¹⁾に引き続き小田井宿（長野県北佐久郡御代田町）の家屋平面と町並み構成の特質について、藤島亥治郎博士²⁾、大河直躬博士³⁾など諸先学の研究成果を踏まえながら、それに宿絵図による新たな知見を加えて考察を進めたものである。

前稿では、小田井宿に遺存している6葉の宿絵図のうち、寛延元年（1748）の宿絵図（以後「寛延宿絵図」と呼ぶ）の分析を通して、江戸時代中期における小田井宿の家屋平面と町並み構成の特質について考察した。本稿では、文化9年（1812）および嘉永2年（1849）の宿絵図により、江戸時代後期及び末期の家屋平面、町並み構成⁴⁾の特質とそれらの変遷過程について考察している。

なお、小田井宿の家屋は寛延期から嘉永期を通して一般的な町家に類した間取りと在郷の農家によく見られる間取りが並存しているが、前者の間取りは5室型⁵⁾以上、後者の間取りは4室型以下に概ね分類できること。また後述するように嘉永期には主要出入口が街道に面していない家屋が42軒存在するが、そのうちの41軒が4室型以下であること。畳敷の部屋がない家屋が16軒存在するが、全て4室型以下であることなどから5室型以上と4室型以下の家屋では家屋種別や発展形態に相違があると推察される。従って本稿では

宿全体の家屋を大型の家屋（5室型以上）、小型の家屋（4室型以下）の2種類に分けて平面や規模の変遷過程の検討を進めた⁶⁾。

写真-1 文化宿絵図（部分）

1. 江戸時代後期（19世紀初め）の間取りと規模

文化9年の宿絵図⁷⁾（以後「文化宿絵図」と呼ぶ、写真-1）には、街道沿いに並ぶ87軒（本陣と前田原村の家屋は除く）の家主名、建物奥行が記されているが、家屋平面が描かれているのは34

* 名城大学天白キャンパス再開発推進室 工修

Tenpaku Campus Redevelopment Project Office, Meijo Univ., M. Eng.

図一2「通り土間3列型」

寛延元年

文化9年

市右衛門宅

図一1 文化9年 建物奥行分布図

図一3「通り」のある家

写真一2 嘉永宿絵図(部分)

軒のみであるので、ここでは34軒についてのみ分析した⁸⁾。

1-1 家屋の規模(建物の奥行、図一1)

大型の家屋17軒の奥行について分析した結果、7間が6軒で最も多く、5間が4軒、6間が3軒でこれに続く。平均は6.5間であった。

小型の家屋17軒についてみると、奥行4間が11軒と過半数を占め、際立った特徴を示している。平均は4.3間であった。

1-2 間取り

間取りについて、寛延期では全ての家屋が1列型もしくは2列型であった。しかし、文化期になると大型の家屋に、

①街道沿いに部屋が3室並ぶ3列型の家屋が現れる(図一2)。

②「勝手」の奥に位置する「部屋」と座敷の境に「通り(中廊下)」が現れ、接客動線の確保がはかられた家屋が出現する(図一3)。

小型の家屋では、2室型や4室型が主流であり、寛延期と比較して間取りの変化はない。ただし、2室型の家屋(上町・市右衛門宅、図一4)が上手に居室を2室増設し、4室型へ規模を拡大している事例を確認できた⁹⁾。

2. 江戸時代末期(19世紀中頃)の間取りと規模

嘉永2年の宿絵図(以後「嘉永宿絵図」と呼ぶ、写真一2)には、街道沿いの106軒(本陣、脇本陣、社寺は除く)の各家屋の家主

名、建物間口・奥行、平面(間取り)、そして「旅籠屋」の書き込みがある家屋も4軒存在し、職業を特定できる史料としても価値が高い。屋敷内の付属屋の配置関係も比較的詳しく描かれている。

作成年代及び書き込み内容からみて、一条忠良の養女寿明君が十三代將軍家定と結婚する際の下向時の宿割用に作成された絵図の写しであると思われる。文久元年(1861)には貼紙して修正が施され再利用されている。

2-1 家屋の規模

各記載事項のうち、建物間口・奥行について、宿全体と大型の家屋、小型の家屋別に検討した結果は次の通りである(図一5)。

宿全体では間口は7間半が18軒で最も多く、6間が14軒、5間、7間が12軒と続く。平均は6.2間で寛延期より約1間広くなっている。奥行は3間が21軒で最も多く、次いで3間半が17軒、4間が13軒と続く。平均すれば4.3間となり寛延期より約0.5間広くなっている。

大型の家屋(27軒)は、間口7間半が5軒で最も多く、6間、8間半が4軒でこれに続く。奥行は6間、6間半が5軒で最も多く、

図一5 嘉永2年の平面規模(間口・奥行)分布図

7間が4軒でこれに次ぐ。間口平均7.6間、奥行平均6.5間、建坪平均49.5坪となり、寛延期の大型家屋（15軒）の規模（間口平均8.5間、奥行平均7.0間、建坪平均59.5坪）と比較すると間口は約1間、奥行は0.5間、建坪は10坪規模が小さくなっている。時代と共に部屋数が多くなって、比較的規模の小さい5室（以上）型が増えたためと考えられる¹⁰⁾。

小型の家屋（79軒）は、間口7間半が13軒で最も多く、5間が12軒でこれに次ぐ。奥行は3間が20軒で最も多く、3間半が17軒、4間が12軒でこれに次ぐ。間口平均5.8間、奥行平均3.7間、建坪平均21.2坪となり、寛延期における小型の家屋（72軒）の規模（間口平均4.5間、奥行平均3.1間、建坪平均14.2坪）と比較すると間口は1.3間、奥行は0.6間、建坪は7坪規模が大きくなっている。

すなわち、寛延期と嘉永期を比較すれば、この約100年間で

①宿全体では間口約1間、奥行約0.5間、建坪約5坪建築の規模が大きくなった。

②しかし、部屋数が5室以上の大型の家屋は、比較的規模の小さい5室（以上）型が増加したため嘉永期では建坪の平均値が小さくなっている。

③これに対し、部屋数が4室以下の小型の家屋には、元来1室土座住居のような規模の小さい家屋が多数含まれていたため、建物の改善は規模の拡大をとまって幕末まで推移していったと思われる。

2-2 平面構成

図一6は嘉永宿絵図に描かれた106軒について、街道と主要出入口の位置関係、畳敷の部屋の有無などにより家屋平面を分類した模式図¹¹⁾である。これによれば、主要出入口が街道に面した家屋が64軒（約60%）存在するものの、面していない家屋も42軒（約40%）存在すること。畳敷の部屋がない家屋が16軒存在し（全て4室型以下）、そのうち13軒は主要出入口が街道に面していない家屋であること。最も多く描かれた間取りは、農家に見られるような4室型であることなどから、幕末になっても宿場の建物としては発展性に乏しい小さな家屋が多かったと言えよう。

寛延期に描かれた大型の家屋は、土間に沿って表から筵敷の居室（または板間）、「勝手」、「部屋」を配し、上手列に筵敷の居室（または板間）と座敷3～4室が並ぶ2列型であった。

前述したように、文化期には3列型や中廊下の出現により居室の確保や動線への配慮がなされていることが確認できた。

嘉永期では、これらに加えて次の諸点に間取りの発展を見いだすことができる。

①街道沿いに出入口を2ヶ所設け、接客用と通用口に分けて使用したと思われる家屋が出現し、奥庭に面した座敷を整えるなど、家格を整えるような配慮が窺われる。（図一6・a）

②別棟座敷を持つ家屋が見られる。中庭をはさみ「八畳」、「六畳」などと記された部屋を構える家屋が描かれている。しかし、小田井宿の家屋は間口に比較的余裕があったためか、奥行方向への発展は少なく、このような別棟座敷を持つ家屋は2軒のみであった。（図一6・b）

その他、大型の家屋全般の傾向として、街道前面の板間や廊下の普及が進んでいることや、勝手の土間側や土間下手に下勝手を設け、2列型から3列（以上）型、中土間型へ居室列を増加させている家

屋が多いことも確認でき、文化期で見られた居室の拡充や接客空間の整備を更に推進していたことが推察された。

小型の家屋は、寛延期では1室土座住居、2室型が主流であった。文化期では前述したように、規模を拡大した家屋もみられるが、間取りに変化はない¹²⁾。しかし、嘉永期になると少数ではあるが、次のような間取りが現れる。

①4室型の前面の部屋が「見せ」となり、商家の間取りを持つ小規模な家屋が描かれている。（図一6・c）

②4室型の居室上手列前面の部屋部分が土間となり、街道に面した出入口を新たに設けて利便性に配慮した家屋が出現している。（図一6・d）

その他、土間下手に下勝手を設けて中土間型となった家屋が描かれているなど、時代と共に居室の確保や機能面を考慮に入れて建てられるようになったと推察される。

嘉永期における小型の家屋平面の特徴について列記すれば、

①最も多く採用されている間取りは、土間に沿って表側（出入口側）に「勝手」、裏側に「物置」を並べ、居室上手に「筵敷」あるいは「八畳」などと書かれた居室と「物置」を配した4室型¹³⁾（図一6・e, f, g, h）で、3室型（図一6・i, j）、2室型（図一6・k, l）などがこれに続く。

②①の家屋のうち、約55%が街道に主屋の側面を向け、主要出入口が街道に面していない家屋であった。

幕末になっても在郷の農家に類する間取りを持つ建物が一般的であったと考えられる¹⁴⁾。ちなみに嘉永宿絵図には寛延期に多数見られた1室土座住居はまったく描かれていない。

2-3 文化宿絵図に間取りが描かれた家屋と嘉永宿絵図に描かれた間取りとの関係について

文化宿絵図は宿割用に作成されたものと考えられるが、間取りまで描かれている家は中町を中心に34軒のみである。旅籠の他に、普段は商家や農家で、大通行時に臨時に宿泊に利用する建物だけに間取り図を描いている例は、奈良井宿の宿絵図¹⁵⁾でも見られることから、文化9年の宿絵図に間取りの記載がある建物は、大通行時に宿泊可能な家として、専業農家とは別の階層に位置付けることができよう。

この34軒（嘉永期では分筆などにより37軒に増加）に該当する家屋の嘉永期の間取りを図一6に示した。この階層の家屋は全て街道に面して主要出入口を設け、畳敷の部屋を有していたこと、間取りも部屋5室以上を有する大型家屋が23軒存在したことがわかった¹⁶⁾。

2-4 町並み

江戸時代末期の小田井宿の町並みを分析する手がかりとして、嘉永2年の敷地割復原図を作成した（図一7の敷地割参照）。敷地割は、現在の地籍図を基礎に、明治初年に作成された地籍図と嘉永宿絵図の内容を照合し、分筆、合筆することにより作成した。寛延期と比較すると、中町と下町では地割の細分化が進み、上町では隣地との合筆で規模の大きな屋敷地が増加している。この敷地形態と家屋平面及び家屋規模との関係を敷地割復原図に示したのが図一7である。これによれば、敷地間口が拡大した上町では規模が大きくなった主屋の正面（主要出入口側）を街道に向けている家屋が多いのに対し、間口の小さい敷地が多くなった下町では逆に主屋の側面を

図-6 嘉永2年平面型式模式図

街道に向け、主要出入口が街道に面していない家屋が約80%を占め、両町の町並み景観はかなり異なっていたことが想像される。中町は、寛延期よりも町家型の大型家屋が増加し、宿場の中心部としてより整備された町並みを呈していたと考えられるが、個々の家屋は奥行きより間口の大きい建物が多かった。

昭和20年頃の上町の町並みを写した写真が『御代田町誌』¹⁷⁾に載っている。これによれば、茅葺、寄棟造の家屋が軒を並べて町並みを構成していたことがわかる。この写真に写されている町並み景観は、江戸時代末期の景観をよく残しているものと推察される¹⁸⁾。

中町に遺存している安川幸夫氏宅（旧本陣の座敷部分、18世紀中頃の建設と推定）や尾台貞保氏宅¹⁹⁾、安川彰一氏宅（旧上問屋、江戸期建設）、尾台卓一氏宅（旧旅籠、江戸期建設）は元板葺の2階建てであった²⁰⁾ことから、江戸時代末期の中町は、板葺、2階建ての家屋が主体の町並みであったと推察される。

3. 平面の変遷過程

ここでは、寛延宿絵図、文化宿絵図、嘉永宿絵図に描かれた家屋平面のうち、各時代の変遷過程を把握できる代表的な家屋を取り上げ、その特徴を指摘しておきたい。なお、小田井宿の旅籠屋を一覧できる史料には、寛政12年（1800）の「小田井村軒別家業書上帳」²¹⁾、天保13年（1842）の「小田井宿旅籠屋家数人別書上帳」²²⁾と嘉永宿絵図がある。

①次郎右衛門宅 中町 図一8

脇本陣の斜め向かい側に位置する次郎右衛門宅は、天保期には旅籠を営んでおり、宝暦年間には問屋も勤めた家柄である。寛延宿絵図には間口8間、奥行き6間の2列型の平面が描かれ、この時期の大型家屋の標準的な間取りを有していた。文化宿絵図には、居室前面に板間らしき部分が描かれていること、「勝手」奥の部屋が2室に分割して描かれていることがわかる。嘉永宿絵図ではさらに次のような間取りの発展を見いだすことができる。

1) 出入口が2ヶ所になり、家人と客用に使い分けができるようになっている。中央の出入口（客用）両脇には「見せ」、板敷部分が描かれ、商家と思われる平面構成を採っている。

2) 居室の数が増している。

主屋規模は寛延期とほとんど変化はないが（間口8間4尺、奥行き7間）、時代と共に部屋数が増え、間取りが複雑になっている。

図一8 次郎右衛門宅

②孫右衛門宅 中町 図一9

次郎右衛門宅の北隣に位置する孫右衛門宅は、小田井村の名主を勤めた家柄で、寛延期には既に間口9間、奥行き7間半の2列型の大

図一7 嘉永2年 間取りの類型分布図（敷地割の復原図に家屋規模と間取りの類型を記したもの）

型家屋であった。文化期には居室前面に縁（もしくは土間）と思われる書き込みと、「部屋」の2分化が見られ、他の大型家屋にも見られる改築を行なっているのがわかる。嘉永期には間口9間半、奥行11間となり、特に奥行部分で規模が大きくなっており、中庭をはさみ座敷が2室増設されている。廊下や下勝手などの部屋も土間側に出現し、家人や接客用の部屋数の増加と土間面積の減少が時代と共に進行していることがわかる家である。

図一 孫右衛門宅

③判右衛門宅 中町 図一10

脇本陣より4軒江戸方に位置する判右衛門宅は、寛延宿絵図では「甚右衛門」と記された家に該当する。間口8間、奥行4間の4室型の家屋であるが、文化期では街道前面に板間らしき部屋が描かれ、上手の2室が畳敷の部屋になっている。そして、嘉永期には、土間下手に勝手と物置が設けられ中土間式に変化し、居室上手裏に中庭を設け、廊下をめぐらし、その奥に入側付の別棟座敷2室を増設して接客空間の拡充をはかっている。嘉永宿絵図には「旅籠屋」と明記されていることから、これらの増改築（新築か？）は旅籠屋営業のために文化期以後に行なわれたと推察される²³⁾。

図一10 判右衛門宅

④金左衛門宅 中町 図一11

本陣の北隣に位置する金左衛門宅は、寛政期には旅籠屋（兼農）を勤めていた家屋である。寛延期の間取りは、居室上手に座敷2室が並ぶ4室型で、文化期では土間下手に馬屋が書かれているが、基本的な平面構成に変化はない。しかし、嘉永期では居室前面に板間（濡れ縁？）、勝手の土間側に下勝手が描かれ、5室（以上）型の間取りとなっている。

図一11 金左衛門宅

⑤清次郎宅 中町 図一12

本陣より4軒京方に位置する清次郎宅は、寛延期には間口6間、奥行4間の4室型の家屋であった。文化期では上手2室や勝手が畳敷の部屋に変わり、室内空間の質を向上させている。そして嘉永宿絵図には建て替えられた平面が描かれている。街道沿いに二つの出入口を設け、主屋の京方に通り土間を配して家人の出入口とし、居室を3列配しているが、中央列前面に前土間を設け接客用の出入口を付し、左右に「見せ拾畳」と板敷部分、「物置」を配し、商家と思われる平面構成を採っている。「見せ拾畳」の奥にも「物置」が設けられ、職業上必要な機能・空間を第一に考慮して建てられていることがわかる貴重な家屋である。

図一12 清次郎宅

図一13 三郎次宅

⑥三郎次宅 中町 図一13

本陣の向かいに位置する三郎次宅は、寛延宿絵図に「間口四間」、「裏行四間」と記された家屋で、間取りは通り土間に沿って街道側に「筵八枚」、裏側に「勝手筵八枚」の2部屋を持つこの時期では標準的な規模の家屋であった。文化宿絵図に描かれた間取りは、勝手の位置が逆になり、街道側に「勝手」、裏側に「部や」ととられているが居室数に差はなく、間取りも2室型である。しかし、嘉永期では建て替えられ、街道沿いに板間を設けた5室型に変化している。間口4間半、奥行5間と家屋の規模も拡大し、部屋数の確保に努めていることがわかる。

⑦市右衛門宅 上町 図一4、14

上町の西側に位置する市右衛門宅は、寛延期には間口6間、奥行4間のこの時期の小田井宿では標準的な間取りである2室型の家屋であった。文化期には、居室の上手に座敷2室を増設し、4室型へ規模を拡大しているこ

図一14 市右衛門宅

とがわかる。そして、嘉永期では職業上の要求からか、街道沿いの2室を「見せ」とし、前面にあった「勝手」を土間沿いの奥の部屋に移動させている。幕末になると小型の家屋でも、職業上必要な空間を第一に考慮して建てられていることがわかる家屋である。

結び

本稿では、江戸時代後期、江戸時代末期の小田井宿の家屋規模・平面、町並み構成の特質とそれらの変遷過程について、宿絵図を基に考察を加えた。以下にその結果を列記し、まとめとする。

- (1) 江戸時代中期の間取りは1室土座住居、2室型が最も一般的で、中町に存在した5室（以上）型の大型家屋も含め全ての家屋が居室2列以下で中廊下なども全く存在しなかった。しかし、江戸時代後期の大型の家屋には、3列型や、部屋境に中廊下を持つ家屋が出現する。また小型の家屋では2室型から4室型へ規模を拡大している家屋もみられ、部屋数の確保や動線の改善を行なって、時代の変化に対応している様子が窺われた。
- (2) 江戸時代末期には、宿全体で江戸時代中期より間口約1間、奥行約0.5間、建坪約5坪規模が拡大していた。
- (3) 江戸時代末期の大型の家屋には、江戸時代後期までには見られない街道沿いに出入口を2ヶ所設けた家屋、別棟座敷を持つ家屋が出現する。江戸時代末期には家人や接客のための空間の整備や機能分化がさらに推進していることが推察された。
- (4) しかし宿全体で見ると、4室型（上手奥の部屋は物置）が最も一般的な間取りであった。
- (5) 江戸時代末期の町並みは、地割の細分化が進み、町家型式の大型家屋が増加した中町、茅葺、寄棟造で主屋の側面を街道に向け、正面を横手（南側）に設けた家屋が主体の下町と、茅葺、寄棟造で主屋の正面を街道に向けた家屋が主体の上町で構成され、上町、中町、下町でそれぞれ異なった町並み景観を呈していた。

謝辞

本稿をまとめるに際し、名城大学教授伊藤三千雄先生、信濃建築史研究室吉澤政己先生から貴重な御教示を得ました。また名城大学附属図書館丹羽眞吾氏には史料調査にお力添えを頂きました。記して感謝の意を表します。

注釈

- 1) 拙稿：宿絵図から見た江戸中期の小田井宿、建築学会計画系論文集、No. 509, 1998. 7 所収
- 2) 藤島亥治郎：北佐久郡における中山道の宿駅、北佐久郡志、第4巻研究調査編、pp. 93～151, 1983. 9
藤島亥治郎：江戸時代民家の文献的研究—特に信濃佐久の民家について—、建築史研究、14, pp. 12～26, 1954
藤島亥治郎：中山道 宿場と途上の踏査研究、東京堂出版、1997. 9
- 3) 長野県史、美術建築資料編（2）建築、社団法人長野県史刊行会、p. 195, 1990
- 4) 文化9年の宿絵図には間口が記されておらず、また描かれた間取りも34軒のみであるため、江戸時代後期の町並み構成については考察していない。
- 5) 本稿では間取りの形式を、街道から見た部屋の列数や土間形状・位置（1列型、2列型、3列（以上）型、中土間型）、または部屋の数（1室型、2室型、3室型、4室型、5室（以上）型）などを適宜使い分けて表現している。図-6 参照。
- 6) 本稿では、平面の考察にあたって馬屋、床、棚、書院、押入などの諸要素は分析の対象から除外した。註1）拙稿：宿絵図から見た江戸中期の小田井宿 参照
- 7) 宿絵図の裏面に「文化九年 尾州榎家中 御口頭様申十二月日 江戸出立二而本山迄 宿々相改宿□ 右之通二認差上 申候下書」の墨書があり、文化9年の作成と判断される。

- 8) 文化宿絵図に記された建物のうち、間取りの記載がない建物について検討した結果、かなりの家屋が間口と奥行を取り違えて記載されていることがわかった。これらの家屋には間取りが描かれておらず、間取り図による検討もできないため、34軒についてのみ分析した。
- 9) 文化宿絵図には全戸の家屋の間取りが記されていないため、寛延宿絵図に見られた1室土座住居、土間と「部屋」で構成された1室型の家屋などの変遷過程を確認することはできなかった。
- 10) 嘉永期の大型の家屋と同じ位置に建つ寛延期の建物（26軒）の規模を算出すると、間口平均7.2間、奥行平均5.6間、建坪平均40.2坪となり、嘉永期より間口は約半間、奥行は約1間、建坪は約9坪規模が小さいことが判る。
- 11) 寛延期は住居の間取りが1列型と2列型のみで、主要出入口が街道に面していない家屋も12軒のみであったので前稿の模式図は部屋数で分類した。嘉永期は主要出入口が街道に面していない家屋が42軒に増加し、小田井宿の家屋の特徴を示す代表的な間取りとなっていること、幕末になっても畳数の部屋を持たない家屋が16軒存在することから、本稿では主要出入口と街道の位置関係、畳数の部屋の有無で平面を分類した。なお、図中には寛延宿絵図と対比ができるように部屋数をローマ数字で表した。また宿絵図に描かれた間取り図の書き込みは、街道が主屋の上部にくる向きで書かれていることから、本稿では模式図などを宿絵図と同じ向きで描いた。
- 12) 註9）参照。
- 13) 居室上手列が畳敷2室で構成される4室型は少数である。
- 14) 寛延期に見られた通り土間に沿って部屋が3室並ぶ1列（3室）型はまったく描かれていない。
- 15) 木曾奈良井一町並調査報告、奈良国立文化財研究所、1976. 3 所収。
- 16) その他は4室型8軒、3室型2軒、2室型4軒であった。
- 17) 御代田町誌、民俗編、御代田町誌刊行会、p. 223, 1996. 3
- 18) 藤島博士も註2）北佐久郡に於ける中山道の宿駅、のなかで「間口狭く、間数少く、畳敷多く、畳の少ない貧家は宿の両端部に多い。現在なおその傾向を止め、特に宿東端枳形附近に遺された草葺屋の並列は見事である」と記されている。
- 19) 註1）拙稿：宿絵図から見た江戸中期の小田井宿 参照
- 20) 安川幸夫氏宅は平屋建。註2）北佐久郡に於ける中山道の宿駅、pp. 93～151, 及び註3）長野県史、美術建築資料編（2）建築、p. 195, 参照
- 21) 長野県史、近世史料編 第2巻（1）東信地方、社団法人長野県史刊行会、p. 468, 1988. 3
- 22) 長野県史、近世史料編 第2巻（2）東信地方、社団法人長野県史刊行会、p. 447, 1989. 2
- 23) 註22）「小田井宿旅籠屋家数人別書上帳」には「旅籠屋」としては記されていない。従ってそれ以後の改造であるか、またはそれ以前から改造されていたのかは不明である。

（1999年4月5日原稿受理、1999年11月1日採用決定）